

第11回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

【優秀書評賞】

和田 竜征（国際教養学部 4 年次生）

「ネット炎上の研究：誰がおり、どう対処するのか」

田中辰雄, 山口真一／勁草書房(2016 年)

【佳作】

白草 友希（社会学部 3 年次生）

「クール・ジャパン!?：外国人が見たニッポン」

鴻上尚史／講談社(2015 年)

【総合講評】

図書館長 国際教養学部 国松夏紀

2006 年度創設の「桃山学院大学図書館書評賞」、本 2016 年数えて 11 回目、例年通り 4 月末(5 月連休前)に募集を開始し、夏季休暇明け 9 月末に締め切り 25 編の応募を得た。これは第 2 回(2007 年)の 140 編や第 3 回(2008 年)121 編に比べれば遥かに及ばず、寂しい限りであるが、昨年 49 編、一昨年 39 編と比べてもなお一層寂しさは募るばかりである。

さらに加えて 25 編中 9 編が指定書式等の不適合で審査対象外となったのは残念なことである。「40 字×50 行」とか「初版出版後 5 年以内」といったルールに従うことは基本的要件となる。その上で「書評賞応募要項」に従い次の 3 項目が要件となる。

- ①(書評対象本の)内容の要約または概要。
- ②(書評対象本の)良い点や悪い点の明示、それに対するコメント。
- ③文章の読み易さ、表記、文章構成の適切さ。

さらに、筆者が個人的に考える良き書評の要件は、その本を読もうという意欲を掻き立てること。判りやすく言えば、図書館に走らせる書評を良しとする。しかし完璧な書評は逆に読む意欲を減退させるというジレンマがある。そこで、適切な例とは言えないが、犯人を明示しないことは推理小説の評の不文律になる。

閑話休題。上記要件を判断基準として 25 編中 16 編が第一次審査を通過し、さらに検討・検認作業を重ね、優秀書評賞 1 編、佳作 1 編を選んだ。最優秀書評

賞は、残念ながら今年も該当作なしであった。ちなみに、審査委員会は、筆者を含め 5 学部から各 1 名の委員で構成されている。

なお、佳作については 2 編を候補作としたが、その内 1 編は最終的な検認作業の結果、「コピペ(剽窃)」と判明し、審査対象外とした。

優秀賞を受けるのは、国際教養学部 4 年生、和田竜征さん、書評対象本は、田中辰雄、山口真一(共著)、『ネット炎上の研究：誰がおり、どう対処するのか』(勁草書房、2016)である。巷間でとかく取り沙汰される「ネット炎上」に関するこの本格的な研究について、審査委員の一人は次のようなコメントを寄せている。

本書の特色は事例研究を踏まえた定量分析であり、そのためのアンケート調査である。

《学術論文として読むと、専門分野が異なるためか、知識不足を脇に置くとしても事象やアンケートの扱い方等消化できない点が多かった。

例えば、ネット炎上を引き起こした者がアンケートに素直に答えるのかにつき、ネットで他人の言葉等を虚偽と批難しているのだから嘘はつかないだろうという前提を立てているが、その理由が客観的且つ合理的に信頼できるものかにつき説明をしていない。ネット炎上に関するデータを元に、ネット利用者における炎上惹起者の存在比率を割り出した試みには一定の評価がされるべきだが、そのデータについてもより広範に集積を行い、データ解析方法についても検証・再構築

する必要があるので考える。

また、過去の現実社会における暴動とネットで生じた暴動との類似性について述べているが、そこに類似性があると納得するまでには至らなかった。

対して、教育に携わる者として一番有用だと思われるものは、本書末尾に付録として収録されている「炎上リテラシー教育のひな形」である。若年者へのインターネットリテラシー教育をする上で1つの参考資料となるであろう。》

コメント前半は専ら著者たちへの注文であるが、書評者にも考慮してもらいたいところでもある。

また後半の「過去の現実社会における暴動」とは、第6章炎上の歴史的理解で論じられている、近代化3段階説の一環である。軍事革命による国家化、産業革命による産業化、情報革命による情報化。それぞれの段階で軍事力、産業力、情報力の濫用が生じる。炎上は情報力の濫用とする見解である。

この、読み方によっては最も重要な、文明論的理解を、書評がフォローしそこねたのは残念なところである。

しかし、その他は万遍無く内容を把握し、巻末の「炎上リテラシー教育のひな型」についての評価に至っている。

もっとも本書の構成は整然たるもので、要約・紹介の便宜が良い。はじめに、章立て、付録、参考文献、索引という構成。取り分け、各章ごとに要約とまとめが付いている丁寧さである。(いささか繰り返しが多いという印象にもなるのだが)いずれにしても、文献引用処理の方法も含めて、論文等執筆のひな型としても有用である。

さて、佳作は、社会学部3回生、白草友希さん、書評対象本は、鴻上尚史(著)『クール・ジャパン:外国人が見たニッポン』(講談社現代新書、2015)である。

一見すると、流行のクール・ジャパン カタログのようなものに思われるかもしれない。実際、テレビ番組を「元ネタ」にしていることもあって、そういったバラエティ的要素がない訳ではない。しかし、さすが鴻上と言おうか、著者の本意はもう少し深いところにあるようだ。少し長くなるが、審査委員の一人から寄せられたコメントを紹介しよう。

《(1)評者の本文理解はおおむね正当と認められる。

(2)本文の優れた点の要約も、ほぼ妥当と考えられる。

(3)本書は手軽に読みやすい。いってみれば、いわゆる英語「多読本」の低い階梯シリーズの一冊のようなものである。もちろん、自分の「読解力」にあった本を読むことは悪いことではない。しかし、それで満足するようであれば、読書の魅力は発展し得ないだろう。多読本も、獲得した語彙の乏しい者のためにリライト

されたもので満足するのではなく、やがてはオリジナルの英文を味読するためであればこそ意義があるのではないか。とすれば、こうしたたぐいの本の書評に求められることは何だろうか。

テレビ番組をもとネタに、あれこれの生活事象をいくつかの国の出身者と議論し合うところに本書の中心と「読ませる」ところがあるのは書評者の指摘の通りである。しかし、ここで書評者にまさに批評的に考えてほしかったのは、この「読ませる」ところは著者が本当に主張したいところだったのか、あるいは本当に「読ませる」内容を持ったものなのか、という点である。

この書評者が全く言及していないのが、「第三章日本は世間でできている」である。たしかに、著者の鴻上自身が、このテーマは別の著作で書いているところなので、「飛ばしてかまわない」と述べている。だが、ここで述べられている、日本型の雇用制度や「世間」論にこそ、一見外国とかなり違う日本の生活風景あるいは「クール・ジャパン」の根っこを見る際の著者の視点があると思われる。書評の終わり近くで、鴻上の議論の「内容は個人的には日本人である私の考えと少しずれている事も多かった」と、「同じ」日本人なのに違っている、ずれていることへの疑問が呈されている。この疑問はまさに第三章に関係していることであり、鴻上の「世間」論をどう考えるかによって「ずれ」に対する評価も異なってくるのではないだろうか。

また、部分的には書評でも捉えられているが、著者は国家の売り込み戦略としての「クール・ジャパン」には強い批判を有している。それは「エピローグ」でかなり突っ込んで書かれている。そして、「最後に」では、「クール・ジャパン」事象を「日本人として誇りを持って」式で捉えることに、「無気力肯定」本を展開するビジネスと重ね合わせて、強い違和感を表明している。ここには、一書の大部分をリーダブルで「心地よい」「クール・ジャパン」事象をあげつらって読者の購買意欲をかき立てる出版戦略と矛盾するかのような著者の「本音」が垣間見えている。

まさに、こうした「多読本」が読まれ、それが批評されるとすれば、それは表象的記述の背後に隠れた著者の意図、あるいは著者自身もまだ漠然として明確な輪郭をもたないかもしれない思想をつかみ出し、より深層に向かう読書の発展方向を示すことであってほしい。それは、例えば、鴻上の基礎的視点である阿部謹也氏の「世間」論や日本型「終身」雇用の虚実を深めるような読書への示唆がのぞまれるところである。さもないければ、鴻上の心配通りの「無気力肯定」読書の「感想文」に過ぎないものに終わるからである。》

書評者の白草さんには勿論このコメントを踏まえて、もう一度鴻上の『クール・ジャパン』を読み直して欲しいし、出来れば書評そのものを書き直してみてください。そしてまたこれらの応答をトータルにフォローする奇特な読者が出現することを待望するものです。

【 優秀書評賞 】

「ネット炎上の研究：誰がおり、どう対処するのか」
和田 竜征(国際教養学部 4 年次生)

インターネットが我々の生活に根をおろして 20 年ほどが経つ。常時接続社会と形容されるように、現代のコミュニケーションの形態はインターネットが登場する前後で大きく変化した。それは、場所や時間を問わず多くの人々の発信する情報にアクセスする事ができ、自らも同じように情報を発信することが出来るようになったからである。インターネットは我々のコミュニケーションに革命をもたらしたといっても過言ではない。しかしながら、いい事尽くめの革命であったかと問われると、到底肯定出来るものではないだろう。なぜなら、自ら発信した情報が多くの人々から批判を受け、炎上してしまうリスクが伴っているからである。

炎上を題材とした書籍は多岐に渡って存在している。そんな中でも、本書「ネット炎上の研究」では、事例研究が主であったこれまでの書籍と大きく異なり、「炎上参加者はどれくらいいるのか」と量的な側面から炎上を捉えているのが大きな特徴である。炎上を起こさない対策を考える際に事例研究は決して欠かすことの出来ない重要なファクターである。しかし、「木を見て森を見ず」という言葉があるように、炎上を起こしている集団を明らかにすることも同様に重要な研究であるといえる。なお本書の著者は、慶應義塾大学経済学部准教授の田中辰雄氏と、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター助手の山口真一氏であり、いずれも計量経済学を専門にする研究者である。その「統計」という学術的で緻密な手法を用いた研究から、炎上という現象を新しい角度で捉えていることが本書の最大の魅力である。

また、著者は事例研究を疎かにしているというわけではない。全 8 章の構成で様々なアプローチで炎上という現象を明らかにしている。1,2,3 章では炎上の社会的コストを解説しながら多くの事例を紹介している。そして、4,5 章では統計を用いて炎上を起こしている集団の数を明らかにしている。統計は、1992 人へのアンケート調査ということで、インターネットの全人口の割合を考えると決して多い数字とは言えないが、そもそも炎上の研究でアンケートによる統計調査を用いるのは本書の研究が初めてである。そのため、これからインターネットの炎上に関する問題を研究する者にとっては、本書は大きく影響される文献の一つとなるだろう。何を隠そう筆者もその一人である。

しかし、炎上への対策という視点で見ると本書には批判すべき点いくつか存在する。それは現代を生きる我々に対する具体的な対策をほとんど挙げていないという点である。もちろん皆無というわけではない。7 章ではサロン型 SNS という情報の発信と受信をある程度分離させた新しい SNS の形態を提案している。このサロン型 SNS の仕組みは実によく考えられており、

炎上を抑止する効果は十分期待できるだろう。だが、それはあくまでサロン型 SNS 上での構想である。うまく機能するかは確認できないし、現実にはサロン型 SNS が存在しない我々にとっては仮想の出来事としか受け入れることが出来ない。また、8 章では政策面での炎上対策を提唱しているが、同じく現状の炎上に対してのアプローチではない。以上のように、本書には「今日から炎上を防ぐために実行すべきことは何か」といった問いの答えは書かれていない。

以上が本書に対する批判であるが、現状への具体的な対策を記さないということは現代を生きる我々にとって重要なことであると筆者は考えている。先述の通り、インターネットは我々の生活にとって、もはや環境となってしまっている。そのため、「意識して使う」ということがなくなってしまうのである。これは極めて恐ろしい事態である。なぜなら、あまりにもインターネットが当たり前になってしまうと、そこに孕んでいる危機を考えることが出来なくなってしまうからである。あまりにも生活に溶け込んでしまっているため、使用する際にもっとも重要な「考える」プロセスが欠如してしまうのだ。著者は、あえてこの答えを提示しないことによって読者に対して、炎上の対策を自ら考える動機付けを提示しているとも捉えることが出来るのではないだろうか。

IoT(Internet of Things)の時代とも言われるように、これからインターネットは我々の生活により深く結びついてくるだろう。そういった時代であるからこそ炎上のみならず、様々な問題に対して「考える」ことが重要なのである。本書は炎上研究の知見だけでなく、我々とインターネットの未来をより明るいものとするきっかけも与えてくれるだろう。

【 佳作 】

「クール・ジャパン！？外国人が見たニッポン」

白草 友希(社会学部 3 年次生)

本書はラジオ・パーソナリティ、映画監督を始め、幅広い活動をしている作家・舞台演出家である鴻上尚史による日本人論である。彼が海外で舞台演出をてがけた時の経験や、NHK BS の番組「COOL JAPAN」の司会をする中で改めて知った「クール・ジャパン」について綴られている。「クール・ジャパン」とは漫画やアニメのメディアコンテンツを指す用語として今日では有名だが、ここではそうした国家的な売り込み戦略ではなく、外国人から見た日本の現代文化・風俗について綴られている。

日本人論らしく日本における男女や親子関係や、日本の「おもてなし」という接客業のあり様、ユネスコ無形文化遺産にも登録された和食など、国際的に「メイド・イン・ジャパン」の文化として知られている多岐のテーマが本書には登場する。

中でも、読ませるのは「外国人がクールだと思った日本のものベスト20」であろう。かつての日本人論では西洋と東洋の違いについて、文化論的に語られることが多かった。しかし、ここで取り上げられるのは、「生まれたばかりの子供を別室で寝かせるか、親と一緒に寝かせるか」という具体的な生活習慣から浮かび上がる、日本の常識の問い直しである。プロローグには「相手を知り、自分の国を知ることは、やがて、自分自身を知る事につながるんじゃないかと思います。世界にはこんな見方があり、こんな考え方がある。多様であることを楽しむことは、きっと自分自身の人生も豊かにし、深くすることになるのです。」(本書15頁)という記述があり、それが本書のテーマにもなっている。

NHKの「COOL JAPAN」という番組では、毎回テーマを決め様々な理由で日本にやってきた世界各国からの外国人と一緒に話し合うところに醍醐味がある。本書にも収められているが彼女、彼らの肉声が収録されている。そのため、われわれ日本人が考える日本らしさ、そしてそれとはまた違った、外国人だからこそ目に映る日本らしさも記されている。それだけではなく、海外各国のお国事情があらわになる瞬間もあり、従来の日本人論と一線を画している。

それだけに海外から見て日本のここがおかしいとストレートに書かれている一方で、少し失礼だな、と思う事も出てくる。「日本人は言いたいことを言わない」という記述を読めば、何でもズバズバと言う外国人と、思っても口に出さない日本人は、どちらがおかしいというわけではないだろう。それはその国の考え方の違いによるものである、ということが相対化して眺められる。

各章はテレビ番組のスタイルを踏襲し、毎回具体的

なテーマをひとつ設定し、番組に登場した外国人の反応や意見、自らの体験についての話を紹介する。そして彼、彼女らが紹介した外国ではなぜそれが「正しい」振る舞いなのか説明される。とはいえその外国とは、アジア圏、北米、南米、欧州、アフリカまで様々な地域に及ぶ。筆者は日本人代表としてそれに共感したり反論したり、はたまた感銘を受けたりする。例えば「日本人は泣くことが好き？」というテーマが組まれた時、ほとんどの外国人は「まったく理解できない」と回答した。番組に参加していたアメリカ人や中国人は、「涙」は「弱さ」の象徴であると言う。多くの日本人にとっては感動した時に涙を流すことは心を揺さぶられたことを示すひとつの態度として広く受け入れられている。だが、海外では全く評価されない、むしろマイナスの行為となる。

ひとつひとつの日本にまつわるエピソードが各国の視点から比較検討され、前後の各章の繋がりはあるとは言えないが、興味深い内容となっている。外国人の自由な発言に日本人である鴻上が、反論、弁解、釈明を行う。その内容は個人的には日本人である私の考えと少しずれている事も多かった。それがグローバル時代の多様性が重視される今日の日本人論として評価できる点であると思われる。



書評とは・・・「書物の内容を批評・紹介すること。また、その文章」(広辞苑)

<今回の募集要項>

- 応募資格** 本学部学生、社会人聴講生、市民利用者とする(科目等履修生は除く)。
- 書評対象図書** 原則として初版出版後5年以内の本学図書館所蔵の図書とする。
- 書評の要件**
 - ①書評図書の内容の要約または概要が盛り込まれていること。
 - ②書評図書の良い点や悪い点が明示され、それに対するコメントが述べられていること。
 - ③文章の読み易さ、表記の適切さ、文章構成の確かさに留意すること。
- 応募要件**(主要項目のみ抜粋)
 - ・応募作品は応募者の独創的な書評であり、かつ未発表原稿に限る。
 - ・本文は1,500字以上2,000字程度とする。
 - ・A4版横書き、全てを1ページに収める。本文は、40字×50行の設定とする。
- 募集期間** 2016年5月13日(金)～9月30日(金) ●**入選発表** 2016年12月2日(金)
- 授賞式** 2017年1月11日(水) ●**応募点数** 25点
- 入選各賞**
 - ①最優秀書評賞 1篇 表彰状および副賞(図書カード1万円)
 - ②優秀書評賞 2篇 表彰状および副賞(図書カード5千円)
 - ③佳作 5篇 表彰状および副賞(図書カード3千円)

次年度も開催予定ですので、是非ご応募ください。(過去には連続受賞された方もいらっしゃいます。)